

特別寄稿について

長崎学院は2005年12月に創立60周年を迎えた。ここに掲載する「真理と自由」と題する文章は、2005年12月3日に同学院のホールにおいて举行された創立60周年記念式典での緒方純雄氏の記念説教である。

原爆の被爆とそれに続く敗戦、その直後の混乱の時期に、本学は産声を上げた。緒方氏はその初代宗教主任として、創立者青山武雄氏の片腕となって、草創期の学校を築かれた方である。

昨今、多くの私学が学生数の減少という厳しい経営状況に置かれている。中には「倒産」する学校も出てきている。地方都市の一私学である本学院もまた苦戦を強いられているが、青山武雄先生や緒方先生、また古屋野宏平先生等、学院草創期の先達のご苦勞を思えば、今の困難など物の数ではないと、緒方先生の教え子の端くれであるわたしはいつも思う。そのご苦勞の一端は本稿からもうかがわれる。

この記念説教を本誌に掲載するにあたり、緒方先生は改めて原稿執筆の勞をとってくださった。ここに感謝を申し上げ、学院の礎を築かれた先生に心からの敬意を表したい。

最後に一言。「飲水思源」(井戸の水を飲むとき、その井戸を掘った人を忘れるな)

2006年9月27日

創立60周年記念行事実行委員会 委員長
学院宗教主任 小西 哲郎

緒方純雄氏プロフィール

1920年生まれ	熊本県出身。九州学院、関西学院を経て、
1945年	同志社大学文学部神学科卒業
1946年～1949年	日本基督教団長崎馬町教会伝道師、 同時に長崎YMCAで講師・宗教主任を務める
1949年～1990年	同志社大学神学部 助手、教授、神学部長等を歴任
1951年～1953年	ニューヨーク ユニオン神学校留学(S.T.M.)
1990年	同志社大学名誉教授
1991年～1997年	新島学園女子短期大学学長
1997年～1999年	新島学園学園長

真理と自由

The Truth and Freedom

緒 方 純 雄

私がこの学園の創立者青山武雄先生の下で長崎馬町基督教会の伝道師となり、同時にYMCAの専任教師となったのは1946年6月であります。原爆投下、終戦後まだ1年もたっていませんでした。その時、私は25歳、今85歳です。1949年3月末に本学を辞職、同志社大学に移りましたので、2年10カ月の勤めになります。専任スタッフとしては今では一番古く、最古参になりました。

学校に来ていた青年たちは、誰も彼も自分まらだしで生き、働いていました。それぞれいた場合は修羅場であった。そこから、後には教室でしたが、初めは応急修理のままの馬町教会堂の教室に来ました。思い思いの服装、靴、下駄などの履物で青年たちは来ました。今思えば、交通の便もないような処からも来ていた。時津からの青年も覚えている。今、この式場に立つと思い出すことが多いです。涙が出るほど懐かしいです。別けても、当時40歳、壮にして果敢、そして温容なる青山先生のお顔が目には浮かびます。

創立60周年記念式にあたって「記念説教」を依頼された時、私は光栄ですと申し上げました。今はそれに倍する思いがあります。

この記念式にあたり、学校法人長崎学院理事長山本敏明先生、理事の皆様、長崎外国語大学及び短期大学、このたび四月に新たに学長の任に就かれた池田紘一先生、教職員の皆様、卒業生の皆様、最後になりましたがLast but not leastの言葉がありますが、どうしてどうして大事な学生、留学生の皆様、心からお祝い申し上げます。

創立者青山武雄先生倒れられて早くも31年。先生は68歳でありました。私はとっくに先生の歳を越えております。しかし学園は装いを新たに、大学は進展しています。課題は大きく、ご努力によって達成されるように祈り、期待致します。私学は創立のヴィジョン、精神を継承する組織体であります。願わくはそうでありますように。

私は1945年9月、終戦の翌月に同志社大学を卒業しました。ひどい混乱状態でした。多くの学生が大学に軍隊から、外地から国内から帰って来ました。始めは無秩序でした。しかし、活気も生命あつての大学復帰のため、漲っていました。しかし、どこへか、何をするかは、とても考えることではなかった。混迷を極めていた。大学は開店休業であった。私は学生寮に居座って大学から本を借りたり、折々教授に指導を求めたりしていました。良かったことは、独りで思索し、研究できたことです。

卒業の翌年五月大塚教授から呼ばれました。話の内容は長崎の青山先生のことでありました。終戦後、当時の人々、青年たちの状況を語る必要はないでしょう。混迷がありました。足もとが崩れ、大地が揺らぎ、今まで頼りにしていたものが壊れ、深い喪失感がありました。生きるに、何のマニュアルもなく、皆手探りで生きていた。青山先生はこの中でキリスト教主義による人間形成、自由自立、そして他者を大事にする人間形成を目指して決断しました。

理解し後援する人はいた。その数は次第に増した。しかし、所詮、決断と重荷、責任はただ 39 才の先生にあった。それは壮挙でした。冒険でした。これに伴って、財が必要でした。しかし、先生は小教会の牧師、財なく、独力で、恐らく松山のご親族の財布をはたいてのご援助があったでしょう。随分あとになって知ったことです。先生の出発は徒手空拳でした。職員二人（一人は夫人のお妹）と先生、合わせて三人の事務所開きで発足しました。これが 1945 年 12 月 1 日であります。

これを告げてくださった大塚先生の言葉に熱がこもっていた。私は感動しました。先生は 1949 年大学長、1950 年より 13 年間同志社総長、この多忙の中に度々来崎、学園の理事もされたから熱がこもっていたのは当然だったでしょう。そして、最後に「緒方君行ってくれないか」と。考えさせて下さいと、言った覚えはない。待遇も部屋のことも言われなかった。私も聞くこともしなかった。そんな記憶はない。あったら覚えている筈だが、ない。

それから一カ月後、6 月 14 日昼頃京都発の汽車に乗った。当時のこと、友人たちから車窓から押し込まれ、幾度も乗り継ぎ、翌日夕方、長崎駅に辿り着いた。ひどい雨であった。教会・事務所に着き、先生不在のため、先生宅に案内された。先生宅の下の坂道はまるで夫婦川町らしく川であった。やがて帰宅された青山先生と初対面した。ご夫人がご一緒であった。それが私にとっては就任式であった。私も打って出たという感慨がありました。

私は学生の勤労働員で作業していた大阪の工場で終戦を迎えました。東京の 3 月 10 日大空襲に次いで 3 月 13 日の大阪大空襲を含めて空襲爆撃を受け、三回宿舎を移りました。惨状を見ていました。しかし長崎の惨状はひどいものでした。長崎駅から二本のレールが浦上、道ノ尾、北へ延びていた。あの櫛比していた家は消えて、グランドみたいになったところを二本のレールだけが走っていた。稲佐山に連なる峰々には緑の木々はなく焼け杭が立っていた。西の城山小学校はマッチ箱みたいに潰れていた。浦上天主堂は倒壊し、かつて堂に観ていた像は横道に落下し、首がもげていたものも見た。更には、放射能は何百年も残り、人の住む地ではないと聞かされていた。この中で、出会って人々の魂の悲哀を知りました。悲しみは深く、私も震えました。一人は僧侶でした。教会の会合の終わるを待って、私は坊主ですと言い、満洲で地獄に落ちた身の上を訴えた一婦人のことを語りました。キリスト教の言い分を聞きたいと佐世保からきたとのこと。ふたりとも、話し合いました。互いに人間の真相に打ちひしがれてしまいました。同年配でした。私たちは苦悩を共有したのです。私たちは、深い苦悩を共有していたのです。

学院は 1946 年 1 月から先駆者的活動を始めた。英語講習会初級科、中級科を古町基督教会、銀屋町基督教会の支持を受けて両教会を教室として始めた。また戦争のため進学できなかった中学、女学校卒業生のため受験科を設けた。このコースの生徒数は 3 月末には減少した。

4 月には馬町教会堂の修理がなり、4 教室が工夫して設けられた。以後 1948 年 9 月まで 2 年半馬町教会堂が学院の校舎であった。修理されても応急修理であって原爆による破壊の跡が目についた。しかし、ここで勉強し、多くの体験を共有し、そのなかに友情が芽生え、また賛美歌があり、先生たちは長崎経専や活水の先生たちであり、ポーズはなかった。時に脱線して映画や文学の話があり、教室にはヒューマンな親しみがあつた。私は或るとき格調高い英語を洩れ聞き、動転したことがあつた。伊東勇太郎先生だった。当時 17 歳だった乙女がつい数年前に私に「あの 55 年前の日々が私の人生の原点です」と言ってくくださった。整わない施設のなかで心みちた思いを私は幾度も聞いた。

4月から婦人教養科（1期）が発足した。私が関係し、科目を担当したのはこの1期生の途中からである。女学校卒業生たちであり、英語と幅広い教養科目が教えられていた。皆熱心であり、英語も教養科目も彼女たちは目を輝かせて聞いていた。初めてリベラルなクラスへ道が始まった。そして2・3期が続いた。1期生、2期生、3期生はそれぞれ個性があった。1期生は地味、2期生は少しモダン、3期生は明るく、服装もファッショナブル。戦後でも半年で違いが出ていた。

9月に受験科が発足した。陸軍士官学校から入った者もいた。かなり野心的な学生もいた。諫早から通った青年、混迷のまま大学を目指した者、目指す大学の選択もそれぞれであった。今も昔も同じく立ちすくむ青年もいた。ヒロポン中毒でぶらりと教室を抜け出た青年を母親から頼まれていたので、追って春徳寺をうろうろしたこともあった。勿論事務所の人に助けってもらった。自殺した青年もいた。彼はいい、真面目に考える青年だった。名前も風貌も覚えている。

夏期には昼夜英語・会話教室が開かれた。広い年齢層の人々が出席していた。市内で有名な洋裁学院の院長先生も熱心な一人であった。教室は学歴も条件としなかった。私も教えて楽しかった。一人とは今年の彼の死まで交友が続いた。リーダーズ・ダイジェストを読み、後には英字新聞を読むまでになった。ほぼ同年配だったが、その熱心さには敬意を抱いた。女性も多かった。私は「市民教室」はやり甲斐ある教育であり、教師にとって嬉しい仕事だと言いたい。

1947年4月念願の長崎外国語学校（専門英語・商科）が認可され、発足した。私たちにとって晴れの日であった。入学試験を実施した。試験場は片淵町の長崎大学だった。皆興奮した。吾がこのように小躍りした。夜学に通っていた青年たち、教室にきていた市民もバケツに糊を入れ、夜な夜な町を巡って電柱にビラを貼り続けた。馬町教会の斜め前の勝山バプテスト教会が一部を教室として提供してくださった。この専門学校はやがて1950年発足の短期大学へと進展を遂げた。

1948年9月には県と市より、また特に熱意をもって願っていた米国YMCAより多額の資金、各方面より助成金・援助金を頂いて長崎市本大工町に長崎YMCA会館が竣工し、初めて待ちに待った校舎ができました。教室、講堂・チャペル、自然科学教室、図書室、レクリエーション室、事務室、学長室、一階北隅に8月米国アーカンソー州から赴任したJames Wilson氏の居室があった。ウィルソン氏は米国メソヂスト教会が大学卒の青年を募って日本各地に送った青年の一人であった。彼らはJ3と呼ばれ、学校に、社会事業に、セツルメントに日米青年協力で目覚ましい活動をした。J3 (Japan 3) とは約束期間が3年の意である。活水にはメヤー、ポイヤの二人の女性が赴任した。新校舎、それに新しい米国青年教師を迎えて教育は新しい局面を迎えました。ジム・ウィルソンの兄はハーヴァード大学教授で最近来日している。ジムは米国市民で日本政府から退去処分を受けた第一号であった。まっすぐの性格で社会的活動が好まからざる人物と映ったからであろう。連行されるジムの多くの人が駅に見送った。長崎は彼には懐かしい地である。今も毎年彼を中心として集まる長崎関係のグループがある。私も出席したことがある。音信は欠かしたことがない。

青山先生と私がチャプレンとなっていた。新校舎の中に笑い声があり、おしゃべり、立ち話、歌声があった。幾つものグループができた。エンライト、プログレッシブなど3グループは覚えている。クリスマスはどこよりも早く、デパートよりも早く、クリスマス讃歌が歌われていた。とにかく学生は生き生きしていた。来訪者も多かった。オランダ政府関係者もあった。私は初めて通訳をした。きれいな英語だった。YMCAからの公式訪問があった。青山先生の喜びはひとしおだった。これは今

後の進展の第一歩であった。

市民への学院の開放は一面では文化活動であった。1948年頃から、はっきりしていないが47年頃から、音楽会をひらいた。教会二階の部屋で巖本真理を見かけたことがある。原智恵子、モギレフスキー、野辺地瓜丸、クロイツァー（恐らく宮副氏を介して）、藤原義江等を招いて音楽会が三菱会館、県立女学校講堂で開かれた。学院の青年たち、私たちが入場券のもぎり役をしていた。当時としては斬新な企画であった。よく来てもらったものである。他面これは学院にとっては財的に大きな助けとなった。青山先生の苦勞が偲ばれる。学生有志が紙芝居をして、その益を学院に寄付したこともこれとダブッテ感慨深い。

私はここで絞って夜間部についてお話ししたい。この学園は夜間部で始まった。独断的かも分らないが、「始めに夜間部ありき」です。これは事実です。そして私は誇りを持ってそういたいのです。ドイツ語で言えば深い意味でのフモールがここにまた学園全体にありました。1947年に専門学校ができて夜間部は別科として存続した。学生は生き生きしていた。活気があった。

- 一 彼らは昼間働いている勤勞者だった。働かねば生きることはできなかった。だから夜に学校に来なければならなかった。働いた者の息吹を感じ取りました。
- 二 年齢も不揃い、男女入り混じっていました。ここでの「日々が私の人生の原点です」と言った17歳の乙女も、私より年長の人、もっぱら家事が私の仕事と割り切っている人も多かった。家事、食料入手は懸命に苦勞する仕事であった。
- 三 勉強も、姿勢はこれを貫いて本当のものを捉えようとするのであった。彼らにはマニュアルはなかった。原爆、そして国破れ、今までのものが崩壊した。精神的にも物質的にも、自分を支えてきたものが、頼ってきたものが、なくなった。それは心の底に、魂までも達していた。生まれて初めて、先人たちが、父母、祖父母、いな祖先が体験しなかったものを体験した。程度は違っていたが、みなこの体験を共有していた。この共有から友情が生まれた。共有から生命と生命の共有が生まれた。

教会の人々も体験を共有していた。教会の青年たちも同じであった。年長の人々も同じであった。この共有と交わりが、教会の礼拝出席となった。また青年たちには初めてのクリスマス、さらにはクリスマス・キャロリングであった。

ここに思いがけないことが起こった。今までのものが、頼っていたものが崩壊し、これらを失い、また将来を見据えても何も見えず。気がつけば自由、自分が自由の中に置かれていた。ここには自由があった。後先のことを考えなければ、すばらしい自由があった。それは闇の中の灯火、花であった。

よく考えれば、自由は所詮自己を中心とする。自己をナンバーワンにしようとする欲性であり我執である。自由自立の主体が叫ばれて久しい。しかし主体性は風化し、我執にすり替えられ、墮して卑しく、地に落ちている。かわって社会を害し、人災人害を引き起こしている。しかし、学院で出会った青年たちには、破壊されて喪失した者には、直ちに我性、欲性にすり替えられる自己はなかった。自己不在であった。さあ、自由に勝手にやろうとしても、やろうとする自己はなかった。むしろ空白の中で、自由のうちに自己を形造らねばならなかった。自由の中から身を立てる道を歩まねばならなかった。自分があっての自由ではない。自由があって、その自由はキリスト教から汲んで、自己形成が始まるのである。その意味で、自由は偉大な空白、偉大なプラスである。否定即肯定がある。

青年たちの中に幾つものグループが生まれた。エンライトとかプログレッシブとか。数えれば、三・四あったように記憶している。60年近く続いているのはエンライト。本来はエンライトウン（啓発する）、或はエンライトウンメント（啓発）としていたが、60年近く続いているなかでエンライトが通称になっている。他界した者、ケア・ハウス、多少不自由の人、つき添われて出席する人、大阪、東京から来る者、年齢も平均80歳。すでに曾祖父母の人もいる。約20名。一緒になれば馬町教会を訪れ、懐かしい賛美歌を歌い、プリントした主の祈りを唱え、牧師先生から勧めを聴くこともある。懐かしい校舎であり教会である。それぞれ働き、歩んできた道も違っている。今は市内自治会で指導的役割ある人、俳句で全国的活動するもの、書道の人、三菱で技術に長じ今も技術的助言を求められているもの、海洋気象観測に多年働き、今長崎でカメラ撮影に有名なもの、労働基準監督に従事したもの、郵政局に勤めたもの、教会で日韓友好に努力しているもの、家事をよくし家族につかえたもの。友人を心にかけて、集まれば亡き友を偲び、互いに安否を問い、祈るのが常である。数年前、一人から手紙を貰った。「原爆で街を焼かれ、食べる物も着る物も不自由な時代でした。先生たちと出会い、友達とのふれあい、キリスト教の教えや導きによって今日まで生きてこられたことを感謝しています。」おそらく皆さんを代表した言葉でしょう。横尾の大学を指して、私たちの母校と云い、心にこの思いが去来しているだろう。

創立して60年の歴史の中での私が勤めた年月は短い。枚数も限られており、体験についても、書いているうちに、思い出してくることも多い。人も事がらも走馬灯のように浮かぶ。創立早々の時期であり、更に終戦後のことで人間まるだし、私もまるだし、ポーズなしで会い、話し、交流していた。いろんな体験も共有した。だから、式場に立って話すとき、懐かしくて涙をこらえていた。

記念説教だったが、創立して三年近い学院の歩みを通して青年たちの体験をくみ取って、そこからキリスト教のメッセージ、また青山先生の挑戦を考えようとした。

ヨハネ福音書14章6節に「わたしは道であり、真理であり、命である」とイエスは言われる。道がないもの、道を知らないもの、道を歩んでも、先を見据えて歩けないもの、どこからどこへを歩くか分からず、最後には立ちすくむもの。真理でないものは永続しない。真理は本当のもの、永続するもの。これを知らないものは基盤がないもの、右往左往ししっかりせず他の人に付和雷同するもの。おおよそ毅然とした自主の人でない。命は脈動するもの、生きる力である。倒れないもの。命は他の命と交わり、人が人を思い、人が人から思われる関係をつくるもの。命は愛となる。命を知らないものの愛は墮す。私たちは戦後の状況の中で「わたしは道であり、真理であり、命である」とのキリストの言葉を聴いてきた。

ヨハネ福音書8章31, 32節「あなたがたはほんとうに私の弟子なのである。また真理をしるであろう。そして真理はあなたがたに自由を得させるであろう」これは同志社を創立した新島襄先生の愛句である。私は、青年たちが困窮の中で打ち当たった偉大な空白、偉大なプラスである自由、前代未聞の自由から切りひらいたそれぞれの人生を顧みて、キリストの真理を受けて一期である人生に自由があり、天真爛漫それが発揮するように祈るものです。

カーライルが1866年71歳にしてエディンバラ大学長（前任者は元首相グラッドストーン）就任の辞の中で学生たちに、また聴衆に向かって...you who are young, yours is the golden season of life...the seed-time of life と促している。願わくは、今が人生のゴールデンシーズンとなり、種蒔きの時となりますように。